

## 温州ミカンのせん定が収量ならびに果実品質に及ぼす影響

今村俊清・岸野 功 (長崎県果樹試験場)

Toshikiyo IMAMURA and Isao KISHINO : Effects of Pruning on Yield and Fruit Quality of Satsuma Mandarin

長年の連年せん定, 隔年せん定, 無せん定のせん定処理が温州ミカン樹の収量ならびに果実品質に及ぼす影響を検討したので, その結果について報告する。

### 1. 試験方法

長崎県果樹試験場内に1953年に植栽し, 1965年まで慣行せん定を行ってきた13年生林系温州を1区2本あって供試して, 1966年より下記のとりのせん定を実施した。なお, 各区ともせん定以外の管理は同一であった。

(処 理)

- 連年せん定: 毎年せん定を実施
- 隔年せん定: 奇数年にせん定を実施
- 無せん定: 無せん定

### 2. 結果および考察

- 1) 無せん定区が最も生産が安定し, 収量が多かった。
- 2) 果実の大きさについては, 概して, 連年せん定区が他の2区に比べ, 果実が大きい傾向がみられた。

3) 果皮の着色については, 差が認められない年が多かったが, 隔年せん定区で着色が劣る年もあった。

4) 浮皮の発生は, 年により発生程度が著しく異なったが, 概して無せん定区の発生指数がやや低い傾向であった。

5) 果面の粗滑も年により差が認められた。せん定によっては, 連年せん定が粗皮指数が高い傾向であった。

6) 傷果の発生については, 無せん定区で傷指数が低い傾向が認められた。

7) 果汁成分については, 糖度は無せん定区が高く, 連年せん定区が低い傾向であった。

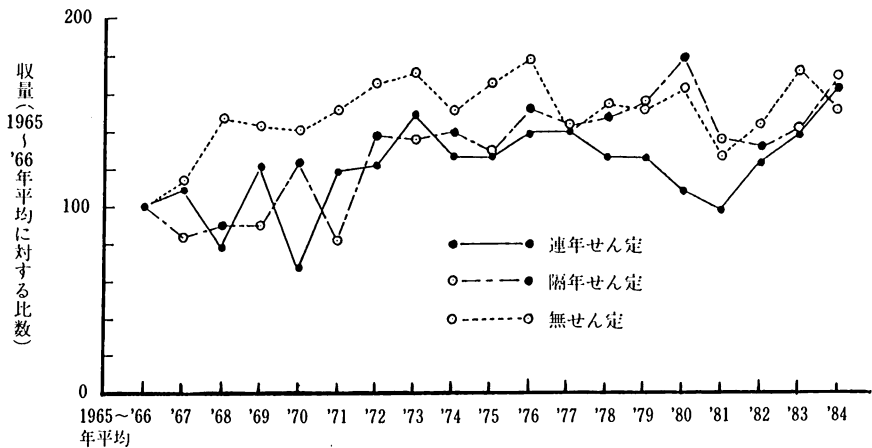
8) 酸含量については, 無せん定区に高い年があった。

9) 以上のことにより, 無せん定区は収量などで他のせん定処理区より優れるといえる。しかし, 無せん定樹は作業性が著しく劣るため, 必要最少限の間引き主体の軽いせん定を成り年に行う必要があると考える。

第1表 1972~'83年の12年間のせん除葉数(1樹当たり)

単位枚

処 理	'72	'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83
連年せん定	3399	7554	6006	7297	6260	7969	5247	4020	5128	4635	4302	6120
隔年せん定	5998	0	6409	0	7626	0	6466	0	2740	0	5575	0
無せん定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



第1図 収量の年次変化